

瓜子姫子

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、おじいさんとおばあさんがありました。ある日おじいさんは山へしば刈りに行きました。おばあさんは川へ洗濯せんたくに行きました。おばあさんが川でぼちやぼちや洗濯せんたくをしていますと、向むこうから大きな瓜うりが一つ、ぽっかり、ぽっかり、流ながれて来きました。おばあさんはそれを見みて、

「おやおや、まあ。めずらしい大きな瓜うりだこと、さぞおいしいでしょう。うちへ持もって帰かえって、おじいさんと二人ふたりで食たべましょう

」

と、いいいい、つえの先で瓜をかき寄せて、拾い上げて、うちへ持つて帰りました。

夕方になると、おじいさんはいつものとおり、しばをしよつて山から帰つて来ました。おばあさんはここにこしながら出迎えて、

「おやおや、おじいさん、お帰りかえ。きようはおじいさんのお好きな、いいものを川で拾つて来ましたから、おじいさんと二人で食べましょうと思つて、さつきから待つていたのでですよ。」

と、拾つて来た瓜を出して見せました。

「ほう、ほう、これはめずらしい大きな瓜だ。さぞおいしいだろう。早く食べたいなあ。」

と、おじいさんはいいました。

そこでおばあさんは、台だいどころ所ところから庖ほうちよう丁ちようを持って来て、瓜うりを二つに割わろうとしますと、瓜うりはひとりでに中からぽんと割われて、かわいらしい女の子がとび出だしました。

「おやおや、まあ」

といったまま、おじいさんもおばあさんも、びつくりして腰こしを抜ぬかしてしまいました。しばらくしておじいさんが、

「これはきつと、わたしたちに子供こどもの無いなのをかわいそうに思おもつて、神かみさまがさずけて下くださったものにちがいない。だいじに育そだててやりましょう。」

「そうですとも。ごらんなさい。まあ、かわいらしい顔かおをして、

にここにこ笑わらっていますよ。」

と、おばあさんはいいました。

そこでおじいさんとおばあさんは、あわててお湯ゆをわかして、赤あかちゃんにお湯ゆをつかわせて、温あたい着物たかきものの中なかにくるんで、かわいがつて育そだてました。瓜うりの中から生うまれてきた子こだからというので、瓜子姫子うりこひめこという名な前まえをつけました。

瓜子姫子うりこひめこは、いつまでもかわいらしい小ちいさな女めの子こでした。でも機はたを織おることが大だいすきで、かわいらしい機はたをおじいさんにこしらえてもらつて、毎まい日にち、毎まい日にち、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばつたん、ぎいばつたん、機はたを織おっていました。おじいさんはいつものとおり、山やまへしば刈かりに出でかけます。おばあさん

は川へ洗せんたく濯たくに出でかけます。瓜子姫うりこひめこ子はあとに一人ひとり、おとなしくお留守番るすばんをして、あいかかわらず、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機はたを織おっていました。おじいさんとおばあさんは、いつも出でがけに瓜子姫うりこひめこ子に向むかつて、

「この山の上には、あまんじやくというわるものが住すんでいる。留守るすにお前まえをとりに来くるかも知しれないから、けっして戸とをあけてはいけないよ。」

といつて、しつかり戸とをしめて出て行いきました。

するとある日のこと、瓜子姫子うりこひめこが一人ひとりで、とんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばったん、機はたを織おっておりますと、とうとうあまんじやくがやって来きました。そしてやさしい猫ねこなで声こゑをつくつて、

「もしもし、瓜子姫子うりこひめこ、この戸とをあけておくれな。二人ふたりで仲なかよく遊あそぼうよ。」

といいました。

「いいえ、あけられません。」

と、瓜子姫子うりこひめこはいいました。

「瓜子姫子うりこひめこ、少しすこでいいからあけておくれ、指ゆびの入はいるだけあけて

おくれ。」

「そんなら、それだけあけましよう。」

「もう少しあけておくれ、瓜子姫子。せめてこの手が入るだけ。」

「そんなら、それだけあけましよう。」

「瓜子姫子、もう少しだ。あけておくれ。せめて頭の入るだけ。」

しかたがないので、瓜子姫子は頭の入るだけあけてやりますと、

あまんじやくはするするとうちの中へ入つて来ました。

「瓜子姫子、裏の山へ柿を取りに行こうか。」

と、あまんじやくがいました。

「柿を取りに行くのはいや。おじいさんにしかられるから。」

と、瓜子姫子がいました。

するとあまんじやくが、こわい目めをして瓜子姫子うりこひめこをにらめつけました。瓜子姫子うりこひめこはこわくなつて、しかたなしに裏うらの山までついて行きました。

裏うらの山へ行くと、あまんじやくはすると柿かきの木によじ登のぼつて、真まつ赤かになつた柿かきを、おいしそうに取とつては食たべ、取とつては食たべしました。そして下したにいる瓜子姫子うりこひめこには、種たねや、へたばかり投なげつけて、一つも落おとしてはくれません。瓜子姫子うりこひめこはうらやましくなつて、

「わたしにも一つ下ください。」

「いいますと、あまんじやくは、

「お前まえも上あがって、取とつて食たべるがいい。」

といいながら、下へおりて来て、こんどは代わりに瓜子姫子を木の上へのせました。のせるときに、

「そんな着物を着て登るとよごれるから。」

といつて、自分の着物ととりかえて着かえさせました。

瓜子姫子がやつと柿の木に登つて柿を取ろうとしますと、あま

んじやくは、どこから取つて来たか、藤づるを持つて来て、瓜子

姫子を柿の木にしばりつけてしまいました。そして自分は瓜子姫

子の着物を着て、瓜子姫子に化けて、うちの中に入って、すまし

た顔をして、またとんからりこ、とんからりこ、ぎいぎいばつた

ん、機を織つていました。

三

しばらくすると、おじいさんとおばあさんは帰かえつて来きましたが、なんにも知しらないものですから、

「瓜子姫子うりこひめこ、よくお留守番るすばんをしていたね。さぞさびしかったろう

」。

「といって、頭あたまをさすつてやりますと、あまんじやくは、

「ああ、ああ。」

といいながら、舌したをそつと出だしました。

するとおもての方ほうが、急きゆうにがやがやそうぞうしくなつて、りつぱななりをしたお侍さむらいがおお、びかぴかぬり立たてた、きれいなお

かごをかついでやって来て、おじいさんとおばあさんのうちの前まえにとまりました。おじいさんとおばあさんは、何事なにごとがはじまつたのかと思つて、びくびくしてきますと、お侍さむらいはその時とき、おじいさんとおばあさんに向かつて、

「お前の娘は大そう美しい織物おりものを織るといふ評判ひょうばんだ。お城しろの殿さまと奥方おくがたが、お前の娘の機はたを織るところが見たいといふ仰せだから、このかごに乗つて来てもらいたい。」

といいました。

おじいさんとおばあさんは大そうよろこんで、瓜子姫子うりこひめこに化けばたあまんじやくをおかごに乗せました。お侍さむらいたちがあまんじやくを乗せて、裏うらの山を通りかかりますと、柿かきの木の上で、

「ああん、ああん、瓜子姫子の乗るかごに、あまんじやくが乗つて行く。瓜子姫子の乗るかごに、あまんじやくが乗つて行く。」
 という声がしました。

「おや、へんだ。」

と思つて、そばへ寄つてみますと、かわいそうに瓜子姫子は、あまんじやくのきたない着物を着せられて、木の上にしぼりつけられていました。おじいさんは瓜子姫子を見つけると、急いで行って、木から下ろしてやりました。お侍たちも大そうおこつて、あまんじやくをおかごから引きずり出して、その代わり瓜子姫子に乗せてお城に連れて行きました。そしてあまんじやくの首を斬り落として、畑の隅に捨てました。その首から流れ出した血が、

きびがらにそまって、きびの色いろがその時ときから赤あかくなり出だしました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：土屋隆

2006年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瓜子姫子

楠山正雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>